
降り注ぐ雨、君を雨宿り。

mck0084

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

降り注ぐ雨、君を雨宿り。

【Zコード】

Z6930A

【作者名】

mck0084

【あらすじ】

平次と和葉は、幼馴染であるも、心中ではお互いを大切に想っていた。そしてこれからも一緒にいられると思っていた。しかし、夏も過ぎようとする頃不慮の事故で平次が亡くなってしまい…。

第1話・夏の終わり（和葉編）

あれは8月も終わりにさしかかった頃やつた。

あたしらはあの日もいつもの様に、一緒にたわいもない話をしながら歩いてた。そして横断歩道を渡り終えようとした時、暴走した車が私めがけて突っ込んできたんや。気付いた時には足がすくんで動かれへんかった。

その時やつた。

あたしの背中が何か大きな力で押されて、道路脇の歩道へ突き飛ばされたんや。同時にものすごい音がして振り向くと・・・

その暴走車は横断歩道を過ぎた辺りで急ブレーキをかけて止まつてた。その前には・・・信じられへん光景があつた。真つ赤な血でまみれたの幼馴染が倒れてたんやから。

あたしは無我夢中で駆けよつた。

持つてたハンカチで必死に出血を抑えようしたけど、すぐに赤く染まってとめどなく血が溢れてくるんや。せやけど、あたし一人じや何にも出来へんかった。痛々しい幼馴染みを前にして助けてあげられへんかった。そやから、あたしは精一杯何度も何度もその幼馴染みの名前を呼んだんや。あいつに『届くよう』、ありつたけの大きな声で。望みを託して・・・。

せやけど、平次はもう田を覚ますことはなかつた。

『平次が亡くなつた。』

通夜、葬式に出てもその事実が実感できへんかった。なんであたしが今ここにいるかもよつ分からへんくて、頭の中も真っ白で何も考えられへんかった。そやから参列者が皆号泣する中で、あたし一人泣かへんかった。

「これは夢なんやつて・・・悪い夢をみてるんやつて思てた。目が覚めたら、今までと変わらん生活に戻るんやつて思てた。・・・また平次に会えると思ってた。

せやけど、なんぼ日が過ぎても何にも変わらへんかった。平次の家や学校、街へ行つても、会われへんかった。電話かけても通じへんから話す事はあるか、声を聞く事すらもできへん。どんなに平次を探しても会われへんねん。会いとうてたまらんのに会えへん。あのキラキラした顔に会われんねん。

ただ時間がだけが過ぎてしもた。日が経つにつれて、今あることが夢やのーて、現実なんやつて実感した。・・もう平次はいなつて事を受け入れなくなかったのかもしねへん。きっと心のどこかで夢であるよう願つてた自分がいたんや。

・・・ほんまに亡くなつてしまもたんやね。・・・なんであたしの事がばつたりしたん。なんだかんだゆうつて平次はあたしの事守つてくれてたけど、

死んでしもたら意味ないやん。・・・あんたが生きてへんと、・・・あんたが側におらんとあかんねん。あたし一人になつてまうやん。

・・・それにあたし平次にまだ大事な事言えてへん。

あの日からこらえてたものが一気に溢れた。とめどなく涙が頬をつたつて、やり場のない想いが込み上げてくる。届かへん想いを天に向かつて叫んだ。

もう一度と会われへん、一番大切で大好きな幼馴染に向けて・・

あの日からすでに一ヶ月、季節は秋に移り変わらつとしていた。

第1話・夏の終わり（和葉編）（後書き）

初めまして、mck0084と申します。執筆に関しては初心者でするので、よろしくお願い致します。

第1話ではいきなりダークな話ですが、平次がいなくなつた和葉の辛さを少しでも分かつて頂けたらと思います。

また御感想・御意見をいつでもお待ちします。

第2話・夏の終わり（平次編）

それは何の前触れもなく、ある日突然やつてきた。

俺はいつもの様に和葉と一緒に歩いていたんや。そう、いつもと変わらんかつたはずやつた。

そして横断歩道を渡つとつた時、前を歩いとつた和葉に向かつて車が猛スピードで突つ込んできただんや。あいつは動かれんでござる。

「あかん、危ない！」

そう思つたら身体が勝手に反応して、和葉の背中を思いつきり押したつてた。

・・・そこから俺はどつなつたか覚えてへん。

氣いつくと車は横断歩道を過ぎた辺りで止まつとつた。

同時に不安に駆られて無意識にあいつの姿を探したら、横断歩道のど真ん中で和葉が座つとつた。

「良かつた・・。」

そう思つたのも束の間やつた。その和葉に支えられていののは・・

血まみれの俺やつた。

・・嘘やつ・・?

俺は訳が分からんよくなつてもうて、とつあえず和葉とその俺らしきもんに近付いた。あいつは俺らしきもんから出とる溢れてくる血を押さえながら、必死にそいつに向かつて俺の名を呼んだ。そやから、

「俺はここにおんで。」

つて言いながら和葉の前で何度も手を振った。そやけどあいつ、俺に全然気がついてないねん。まるで俺の事が全く見えてへんかのようだ。・。

そしてやつと分かつたんや。俺は死んでしもつたんやつて。死んだ事に関して全く悔いがないと言つたら嘘になる。せやけど、あいつを守れたことはほんまに良かったと思ってる。命に替えて守るつて決めてたからな。

自分の通夜・葬式を見るんは何や変な気持ちやつた。おとんにおかんはもちろん、親戚一同や府警関係者、学校の友達、そして和葉。。仰山集まつてくれた。。。ありがとな、みんな。俺の為に。。

特におとんとおかん、子供の俺の方が先に逝つてしまつて堪忍。17年間ありがとな。

そして和葉。お前には随分と迷惑かけてもつて。。。ほんま悪かつたな。そこで、仰山怒らせてしもたし、泣かせてもつた。

おまけに死んでしもうて。。。せやけどお前には俺の分まで幸せになつて欲しい。いつも笑顔でいて欲しいんや。。。

せやけどあいつはあれから一ヶ月程過ぎても俺が死んだ事を受け入れてへんようやだつた。俺の家や学校、街へ行つたり、電話をかけたらしては今だに俺の姿を探してたんや。その度に姿を見せてやりとつて、声を聞かせてあげとうてたまらんかつた。せやけどそれは出来へんかつた。それからしばらして俺が死んだつて事が実感できるようになつたのかもしれへん。その時やつた。あいつの叫びが聞こえたんは。今の和葉の気持ちが分かつたんは。

・・・ほんまに」「へなつてしもたんやね。

『・・・・・。』

・・・なんであたしの事かばつたりしたん。

『・・・・・。』

なんだかんだぬつうて平次はあたしの事竹つてくれてたけど、死んでしもたら意味ないやん。

『・・・・・。』

・・・あんたが生きてくんと、・・・あんたが側におらんとあかんねん。

『・・・・・。』

・・それにあたし、まだ大事な事言えてへん。

『・・・・・。』

和葉の叫びに何にも返せへん。あいつはあんなに苦しんでしちもつてるのに、隣りにいてやる事も、慰める事もできへん。

『俺かて和葉に伝えられへんかった事があんねや。』

せやけどじうなつてしまつた以上全ての想いを受け止めてあげられへん。ただ和葉を遠くから見守る事しかできへんのか。

和葉を何としても守りたかった、せやけど結局あいつを苦しませて

しもつてゐ。

ほんま情けないなあ・・・。今の俺には和葉を幸せにする所か、笑顔を取り戻したる事もできへん・・・。何にもしてあげれへん・・・。この手は何の為にあるんやろか・・・。

愛しい幼馴染みに、気持ちすら届かない事に無力さと自分に対する憤りを感じた。

あの日からすでに一ヶ月、季節は秋に移り変わろうとしていた。

第2話・夏の終わり（平次編）（後書き）

第1話は和葉目線でしたが、第2話は平次目線です。話の時間は同じ時期のものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6930a/>

降り注ぐ雨、君を雨宿り。

2010年10月10日05時17分発行